
慈 恵



平成29年 冬 季 号

No.57

宗教法人 慈 恵 院

付属 多摩犬猫霊園

鑑賞



南無阿弥陀佛

大教正
天龍滴水

意気軒昂、潑刺颯爽、まことに小気味よい。ことに「無阿弥陀」の中間が気合にのり、豁達な禅機が明澄な墨気を呈し、力と大きさと自由さを示す。が、全体に若いという感は、否めない。とくに「南」に気負いと「佛」に不安定さが目立つ。落款は、一段と冴え氣脈貫通するが、ゆつたりとした趣には欠けよう。

「大教正」となるのは、明治五年・五十一歳の時であるから、おそらくこれは五十歳代前半の作であろう。

三日分の飯をまとめ食いする

龍関がある日、某居士と名古屋にでかけた時のことである。出立に際して、飯櫃を出して二升あまりの飯を食いつくしてしまった。某居士、それを見て大いに驚いていた。

「老師のような大食では、旅館の飯のみでは腹をみたすのに足りないでしょう。それどころか、旅館も老師を泊めるのを拒むかもしれません」

それを聞いて龍関は平然としていった。

「なに、飯を食うわずらわしさを避けるために、一度にまとめて食ったまでじゃ」

居士は再び驚いた。

「三日間の食を一度にまかなうことができるとは、まことに大きな腹ですなあ」

「大千世界もまた一口に吞却せん、というような禅僧が二升の飯くらい、何ということもないわ」

龍関は結局、名古屋にいたるまでの三日間、一回も食しなかったということである。

「禅門逸話集成」より

齊藤 龍関 (一八三二～一八九二)

臨済宗。姫路慶雲寺拙心の弟子となる。相国寺の大拙に参じ、ついで越溪に参じ、その法を嗣ぐ。興聖寺に住しのち相国僧堂師家となる。明治二十二年、建仁寺に迎えられ僧堂を開單、同年管長となった。

冬 じよ み

2 月	1 月	12 月	
2 / 14 涅槃会	1 / 1 修正会	12 / 6 成道会	当山行事
2 / 4 立春 ●雨の中に立春大吉の光あり(高浜虚子) 2 / 19 雨水 ●薩埵富士雪縞あらき雨水かな(富安風生)	1 / 6 小寒 ●小寒や枯草に舞ふうすほこり(長谷川春草) 1 / 21 大寒 ●大寒の大々とした月よかな(一茶)	12 / 7 大雪 ●大雪や茎ばかり掃く藤落葉(涙人) 12 / 21 冬至 ●粥くふも物しりらしき冬至かな(一茶)	二十四節気
2 / 3 節分 2 / 11 建国記念の日	1 / 7 人日の節句(七草) 1 / 11 成人の日	12 / 23 天皇誕生日	祝日等



愛犬から教わった 感謝と別れ

千代田区 向後 勇(69)

犬は三日飼われたら……
その恩を忘れず、と言われている。今と違い昔の犬は屋外飼育が殆どで、食事(餌)は、たいてい残りご飯にみそ汁をブツ掛けてのものが多く、又それが当り前であった。当時、私の家ではジローと言う名の雑種犬を番犬として飼っていた。家の前が大通りで車の往来も多かったが、いつも夕暮れになると首のベルトを外し自由にさせていた。ある晩いつものように走り回った後

に戻って来たジローが元氣どころか足を引き摺り苦しそうに喘いでいた。車とぶつかったのかな？後で治療でもしてあげなければと思いつつ家族で夕食を食べていた。ジローは律儀で更に自分(犬)の身分と立ち位置をわきまえていて普段は家の中には決して入っては来なかったが、その晩は裏口の隙間から申し訳なさそうに入ってきて食事私の家族一人ひとりに痛そうにその体を擦り寄せてきた？アレ？さらに驚いた事に、決して上った事の無い二階へも行こうとし苦しうに階段を一段づつ上り始めた。二階の室には妻が寛いでいた、ナゼ？初めて、そして二階までも？私は急いで妻を呼びカレと対面させた。尻尾(しっぽ)を振る気力さえ

も失せたジローは、良く飼(食事)をあげていた妻とも、それでもスキンシップ(すりすり)を済ませた。赤チンをつけ包帯を巻き、手は施したつもりであつたが……その晩、荒い呼吸をしながらジローは世を去った。足のケガだけでなく、おそらく内蔵も打撲していたのだろうか？今にして思えば……。彼(ジロー)は、自身の余命を察し、その恩を忘れず痛み苦しみの体で家族の皆と最期のお別れをした……。

表わしたかった。そう確信する。
報恩と感謝そして別れとお礼……大切な事を愛犬から学んだ。忘れないよジローとしてありがとうジローいつまでもいつ迄も心の家族だよ。

隆と虹の橋

昭島市 野田 雪枝(66)

昨年九月に愛犬隆を十六歳五ヶ月で看取りました。以来毎月の合同法要に家族で参加させていただいております。寒さ暑さの折々にご配慮くださるスタッフの皆様、この場をお借りして感謝申し上げます。
隆は、息子の一目惚れ(笑)で我が家に迎えられました。

手のひらに乗るほど小さくて、まだ一緒に遊べないと言われたのですが気付けば息子の胸に抱かれていたのを懐かしく思い出します。勿論私もその愛らしさに癒されていました。

これまで家族の悲喜交々に寄り添い支えてもらい、改めて隆との出会いに幸せを感じつつ、至らなかつたことも沢山あったのではないだろうかと思いは巡ります。私自身、心臓が悪く隆の大好きな散歩も制限せざるを得なくて可哀想でした。隆も、加齢と共に五感も認知機能も衰えました。獣医さんと相談してその都度対処を考え、家の中は少しでも安全に暮らせるように工夫し食事も水分も・・・。

そうして暑さを乗り切つてホッとした頃、悲しいお

別れを迎えたのです。それは昨日のことのように思い出されます。か細く長く抑揚ある声が続き、私も一緒に泣きました。今にして思えばお別れの言葉をかけてくれたのだと思います。

亡くなってからも暫く、臭いや気配を感じ癒されていましたが、ある晩の夢で枕元を騒がしく走り廻る姿を見て以来、気配が消えたのです。寂しいけれどあの子は虹の橋に着いたのだと思いました。

亡くなった動物達は虹の橋で飼い主を待っていると聞きます。隆も私が迎えに行きそこで楽しく遊んで居ることでしょう。またきつと出会える日を信じて明るく過ごします。

死をみつめて

東久留米市

片岡 由紀枝(50)

夫との食事の帰り、畑にうずくまっているサビ猫と出会いました。

近寄っても逃げず、手にすりすりしてきてとても人間に慣れていましたが、あまりにも痩せているので、ごはんだけでも与え様と思い抱っこをしました。その瞬間、口から血を吐きあわてて動物病院へ駆け込みました。

診察と検査をしたらうと、腎臓も悪く、口の中は口内炎で歯はグラグラ、ひげは誰かに切られたのか短くなっていました。

先住猫がいましたが、外に戻したらすぐに死んでしまい

そうで、家で飼う事に。ここからが病気との戦いでした。

腎臓食に替え、歯の治療やその他検査。少しでも様子がおかしい時はすぐ病院へ。そのかいがあつて、体重も少しずつ増え毛並も良くなつてきて現状維持のまま落ち着いてくれるものと信じ込んでいました。

でもその時は、突然、やつて来たのです。できるだけの事はしましたが、わずか半年で逝つてしまいました。初めて動物の死と向き合い、こんなに悲しい事はないという位泣き、お別れをしました。まりもは、慈恵院から猫のお山へ旅立ちました。最後の猫生が良かったと、まりもが思ってくれていますように。